霧笛にこもる切々たる哀歓！こみあげる別離の悲しみ！

解説

「私たちの本当の姿をえがいて欲しい」という十八万海員と、その家族五十万の声を背景に、桜映画社が企画、製作をした。

☆

「森は生きている」「うなぎとり」等の好短篇で、国際的話題をよんだ木村荘十二監督が、自らの脚本を映画化した久々の大作。

☆

木村監督は、シナリオ執筆に先立って、約半歳を海員たちと生活をともにし、彼らの実態にふれつつ、さまざまのエピソードを把握したが、一方、海員と家族との間に往来した書簡集『愛よ波を越えよ』『航海記』も物語構想の大きな取材源となった。

☆

撮影の主舞台は、一万トン級の巨船を背景とするため横浜と名古屋港湾で、ロケ日数も約二ヶ月を要したが、豪華船の内部や、作業場が劇のエピソードの中に織りこまれており、雄大な海、豪華な船、その内部等一般の人々に魅力的な場面が続出するのも話題となろう。

☆

出演者は、坂本、飯田、水戸、阿部、内藤、松本等映画界と新劇界のベテランが顔を揃えており、大役に抜擢されている新人塚本信夫、明眸筑紫あけみをめぐって円熟の技を競っている。

スタッフ

製作　村山英治
脚本　大西雅夫
監督　木村荘十二
撮影　木塚誠一
音楽　岡田和夫

キャスト

山口操舵手　塚本信夫
山口とよ子　筑紫あけみ
小沢一等機関士　内藤武敏
小沢菊枝　阿部寿美子
高松甲板長　松本染升
高松節子　桜井良子
鈴木機関士　仲村秀生
長谷川和江　中村歌
村山船長　坂本武
渡辺通信長　野々村潔
本社の部長　永井智雄
本社の課長　稲葉義男
鈴木のぶ　飯田蝶子
「ミナト」のマダム　水戸光子

督督のことば

木村荘十二

船乗りといえば酒、女、密輸、港々のいざこざ、果ては、ギャングの登場となってくる。そうしたものが最近の日本映画のテーマにも成りかねない。これは製作者が必ずしも悪意を持って描いているわけでもなかろうが、私はそれとは違ったものを「海の恋人たち」の中でとらえてみたいと考えた。

一年のうち、その大半を海と陸とに別れて生活しなければならない夫婦や恋人たち。海員の離ればなれの生活の中に、人と人とのつながりは、絶対的な信頼感によって支えられている事を私はあらためて、はっきりと知ったからである。

（産経新聞1月26日付記事抜萃）

物語

貨物船N丸は遠洋航路三ヵ月の旅を終えて東支那海を日本本土へと近づいていた。

嵐をついて全速一八ノット。

操舵手の山口も、機関員の鈴木も、一等機関士の小沢も、高松甲板長までもが、陸へあがる楽しさを胸に描いていた。

妻や恋人を求める海の男の心はひとつ。太平洋の荒波も今はかるいリズムとなって速度をあげるN丸。

「八ヒヨコハマニテマツトヨコ」新婚の山口は妻からの電報を何回となくくり返し見ている。停泊はわずか二日。東北の田舎に女教師として働いている妻とよ子を横浜へ呼び寄せている山口は、はやる心をおさえていた。

小沢は結婚七年、六ツになる息子のために、オモチャの自動車を買い、女ざかりの妻を想って一人ほくそえむ。

鈴木の郷里は名古屋。N丸は横浜港で荷役を済ませて名古屋港へと向う予定。そこにはいとけない恋人が待っている筈だ。

小沢の妻は、壁いっぱいにはった世界地図に夫の航路を追って、小さな旗のついたピンを横浜港へと近づけ、元気な姿を求めていた。

○

嵐もようやく去って東の空が明るくなった頃今井操機手の盲腸炎は急激に痛みをまし、山本船医の手にかかって手術を終えていた。村山船長は横浜との距離を計ってN丸は嵐のために相当流されていた。深刻に考えこむ。予定の日没前に横浜港に入ることはむずかしい。名古屋港なら充分に間にあう。船長は刻々進む船から本社へと連絡し、突如N丸は名古屋港へと北上し始めた。その事が拡声器で全員に知らされる。

○

その頃山口の妻とよ子は東北線の夜汽車を一路横浜へと向っていた。見知らぬ土地に赴く不安も消えて、いとしい夫に会える期待に胸をふくらませていた。横浜港へ着いたとよ子はN丸が名古屋港に向った事を知って茫然とした。しかし、とよ子は夫をしたい、その情熱は彼女を名古屋港へと走らせた。すでに名古屋港に投錨したN丸。山口はとよ子を案じその事ばかり考えていた。N丸は荷役を済ませた直後横浜港に向うのだ。二時間後には出港する。

機関員の鈴木は十九才の若さ、恋人の待つ名古屋は彼の出身地だ。タラップを下りて行くとすでにN丸の情報をきいた彼女は、監視小屋にかくれて鈴木を待っていた。茶目っけいっぱいの和江は後から鈴木に飛びつく。若い二人の眼は燃えあがるのだった。

停泊時間二時間、母や祖母にも会いたい。和江を外に待たせてわが家へと走りこんだ鈴木は、明るい笑いを祖母に残して和江のもとへ走る。ようやく二人っきりになれた和江は公園のベンチで思いきり甘えた。彼女にとって初めての事だ、夜のとばりが若い彼等を祝福するように温かく包んでいた。

横浜から名古屋へかけつけたとよ子が、名古屋港の九号埠頭に立ったときN丸はすでに汽笛もはるかに沖へ沖へと出港して行った。とよ子は張りつめていたタガがゆるんで夜の海をうらめしく見つめていた……こうしてはいられぬ。また横浜へ、明日の朝は会えるのだ。彼女は疲れた体で再び夜汽車の人となった。

横浜港の埠頭にはN丸の大ぜいの家族たちが出迎えその中に山口の妻とよ子の顔も見えた。小沢一等機関士の妻と息子も夫たちを出迎えている。岸壁に近づくN丸の甲板から山口がとよ子を見つけ、とよ子も夫の姿を見出してあふれ出る涙をかくし様がなかった。二人はようやく会えたのだ。タラップが下されて家族の人々が登って行く。海の男たちは、港に着いても一定の仕事が終るまで上陸できぬのだ。機械の整備、税関の手続、半日位はすぐに経ってしまう。とよ子も夫の洗濯物等をまとめたりして、仕事が終るのを待ちわびた。何ヵ月ぶりかで会えた夫と話もできぬいらだたしさ。高松甲板長の妻などは要領を心得えて船には行かず船員寮で待っていた。

○

上陸だ、幾組かの家族たちとともに山口もとよ子をつれて船員寮に向った。名古屋港にまで足を運んでくれた女房…山口は妻の温さに感動し、喜びは前にも増して燃え上っていった。寮に着いた二人は恋人同志の様に新鮮で、はげしく抱擁を続けた。

大ぜいの男たちは、束の間の逢う瀬をせい一杯生きるのだ。高松も、小沢も、久方ぶりに家族とともに過す。小沢の息子は近所の子供を家へつれてきてまだ眼のさめぬ小沢のふとんをはぎ、これがパパだと自慢したりする。二日間はアッいう間にすぎた。それぞれの家族たちは灼きつけ未来に希望をつなぐ。いい、山口もとよ子も二人だけの幸福を肌に感じ、明るい表情で送る。岸壁に一人取り残されたとよ子の振るハンカチが丸く輪を描く中を、N丸は太平洋の荒海に向ってまた旅立っていった。

トピック

海上ロケは、連日ニューヨーク航路に就航している実務中の船を追いかけ乍ら撮影した。

船は、就航の時間がくると、さっさと錨をあげて港をあとにしてしまう。非情なくらい、その時間は正確無比でゆう通がきかない。ロケ隊は「船の時間に合せてカッキリとスケジュールを組み、連日、船の乗り降りの時間ももどかしい程、時間にしばられる撮影ぶりだった。スタヂオではみられぬ緊迫した雰囲気である。

ある時、撮影に脂がのりすぎて、船はスタッフを乗せた尽、沖へ出てしまった。陸との連絡がついて、海員組合の小舟が迎えに駈けつけたのでことなきを得たが、あとで「あの俱ニューヨークまで連れてかれちゃうのかと思ったら心細くなっちゃって……」とは阿部寿美子の半ベソの弁。

この映画に寄せられた讃辞

運輸大臣　楢橋渡

この一篇の映画がもたらす人間的哀愁の恋情は吾等の魂を洗う福音とも云える。筑紫あけみの身体全体から溢れる若き人妻の恋々切々の情感こそ私の魂をみりょうした。その他キャストも成功。

この映画をあまねく日本の津々浦々迄流すことは殺人、脅喝、ギャング、淫蕩ものの映画のハンランの中に一抹の清風を吹きこむことになろう。

東京医科歯科大教授　山崎清

結婚前の男女一組と結婚したばかりの一組、そして中老夫婦の一組という、年令層のちがう三つのカテゴリーの性生活が生理的学にみておもしろい。海員のセックス、ルポルタージュか……健康でセクシーである。

評論家　田辺繁子

愛し合い、信じ合い、こがれ合いながら、長い航海の間会うことが出来ない人達。妻にこがれる船中の夫達、夫の帰りを待ちわびる妻たち、みんなハッタリも誇張もない、人間の真実が胸をさす思いだった。この人達の愛情の犠牲に於て、私達は海外の物資にめぐまれることが出来るのだとつづく思い知らされた。こんなに清純に夫婦愛の画かれたものは少い。大人にも、子供にも、誰にでも見てもらいたい。たった二日で又荒波にいどむ男達の、岸壁の妻に手を振って別れ行く必死の表情、それはせつなく私の心に焼き付くのだった。

映画評論家　飯田心美

貨物船乗組員の生活が、こまかいタッチで描かれている。長い航海を終って家族と逢える喜びの出し方も情感がこもっている。キャストも立派だし、画面は**ワイド**だし、堂々たる映画だ。画面の九割迄実地ロケなのも、現実味盛り上げに役立っている。

文部省選定

海の恋人たち

製作・桜映画社　配給・松竹株式会社